

第1編

山岳部の指導者になろう

第1章 登山の楽しさと厳しさを教えよう

1 登山は素晴らしい

高等学校山岳部での活動は、「人間と自然との関係を学び、安全・環境教育にも役立つ」、「山頂での達成感や下山後の充実感」、「山の仲間との友情」、「登山を通しての学びの場」、「自然の美しさ」、「素晴らしい指導者（顧問等）との出会い」など、素晴らしさに満ち溢れている。

教育基本法第2条においては、教育の目標を、知・徳・体の調和のとれた発達を基本に、自主自律の精神や、自他の敬愛と協力を重んずる態度、自然や環境を大切にする態度、日本の伝統・文化を尊重し、国際社会に生きる日本人としての態度の養成と定めている。

この目標を実現できる活動の一つが登山であると言える。山登りをとおして、人と人との繋がりや役割、自然とのふれあい、自然の持つ驚異と素晴らしさなど多くの学ぶべきものがある。しかしながら、登山は「山」という場、自然環境的には平地とは異なりいわば異常環境で行う人間の文化活動なので、高等学校の山岳部の指導者（顧問等）としてはそれなりの知識や技術を学習し、多くの経験を積み上げ日頃からの意識的に行うトレーニングが不可欠である。効果が大きく期待できる活動であるからこそ、指導者としての高い資質が要求される。

1924年の英国第三次エベレスト登山隊で頂上を目指し消息を絶ったマロリーは、「なぜそんなにエベレストにこだわるのか」と問われ、「そこにそれがあるからだ」と答えた。この言葉は、「なぜ山に登るのか」に関して、いまだに語り継がれている有名な言葉である。この言葉の意味するところはいろいろと議論されたが、この言葉には登山の素晴らしさが凝縮されていると思われる。登山という行為は、自らが課題を設定し、その課題に向かって努力し目標を達成しようとする自ら選んだ自発的な活動であるとも言える。したがって、そこで得られる素晴らしさや魅力は人によって多種多様である。

青春時代の真っ只中、多感な高校生にとって山岳部の登山活動は、楽しさや素晴らしさに満ち溢れている。

（1）人間と自然との関係を学ぶ場

人は自然に働きかけ自然と共生して生きている。特に山の中では文明社会から束の間逃れ大自然に抱かれ深い安らぎと喜びを感じることができる。さらに、自然の持つ脅威への危機感や緊張感も身に付けることができる。登山を通して、人間と自然との関係を学ぶことは、災害列島と言われる昨今の状況に対応できる安全・環境教育にも役立つ。

（2）山頂での達成感や下山後の充実感

みんなで登山計画を立案し、準備会を重ねトレーニングに励み、「衣食住」を準備してザックに詰め、汗をかきながらその重いザックを背負い、時には風雨にさらされ、幕営をしながらの長い道程を辿り、急な坂道を登り山頂に達する。この頂上を踏んだ時の達成感や成就感は何とも言い難い感動である。さらに、無事下山した時の目標達成の爽快感、充実感は格別である。

（3）山の仲間との友情

山岳部での活動は、良き山の仲間（先輩・後輩）と共に顧問の指導の下、日常の人間関係を通して行われる。そこでは、協調性、責任感、指導力等が育まれるが、山仲間の友情は特別である。実際の登山の計画や準備、励まし合いながらの登頂、幕営での語り、下山後の思い出話等を通して培われる友情は、同じ目標に向かって正に「同じ釜の飯を食べ辛苦を共にする」という経験の共有から生まれるもので、生涯の友となりその後の人生の糧になる。

（4）登山を通しての学びの場

登山は体力や登山技術の他、衣食住に関する生活技術、自然環境（地形、気象、動植物）、トレーニング、医療、歴史、マナーなどに関する学びの場である。

（5）自然の美しさを感じ、自然保護の意識が高まる

山頂からの雄大な眺め、青い空、白い雲、厳しい岩稜、緑豊かな森、清らかな溪流、色鮮やかなお花畑、満天の星など、登山活動を通して自然の美しさを肌で感じて至福の時を持つことができる。このことによって、自分たちの活動の場である山の美しい自然を保護し、登山という実践活動を通して今ある自然を次の世代にまで伝えようとする自然を大切にする心が醸成される。

（6）素晴らしい先生（顧問）との出会い

山岳部の活動は学校内での日常の教育活動を離れ、大自然のフィールドである山で行われている。当然、高等学校の部活動であるので顧問教師の指導下で行われる。計画立案から諸準備、寝食を共にした登山の実行、下山後の反省会と一連の感動と苦楽をともにする活動の指導者である顧問の先生との出会いは、多感な成長期の高校生の今後の生き方に大きな影響を与える。

2 登山に潜む危険

登山活動は、大自然とのふれあい、山頂に達したときの達成感、山の仲間との友情など楽しさが満ち溢れている。しかしながら、自然環境の中で行われる活動であり、そこには自然そのものに内在する危険や、ヒューマンエラーによって登山者自身が危険にさらされることがある。危険を避け、楽しい登山をするためにはどのような心構えが必要か、日頃から研鑽しておく必要がある。

警察庁の統計資料「平成29年における山岳遭難の概況」によると、平成29年における山岳遭難事故の発生件数は2,585件、遭難者数は3,111人、うち死者・行方不明者354人と悲しい事実が発表されている。発生件数、遭難者数は、統計の残る昭和30年以降最も高い数値を示している。過去10年間の山岳遭難発生状況を見ると増減を繰り返しているが、平成25年以降の発生件数は、2,000件以上で推移している。年齢別では、中高年（40歳以上）が遭難者数の77.8%、事故態様別では、道迷い、滑落、転倒の順に多く、全体の72.1%と高い比率となっている。近年、中高年登山が盛んに行われていることが、このような結果につながっていると言える。しかし、私たちの登山には、老若男女関係なしに、ベテランだろうが初心者だろうが、同じような危険と困難がたくさん存在している。初心者だから、落石が迂回してくれるとか、少しおまけして雨が弱く降ったり、風が少し弱まったりすることなどあり得ない。そもそも登山は高所における低圧低酸素下の特別な環境で行う人間の活動なのだ。

(1) 「見える危険」と「見えにくい危険」

登山は大自然の中での活動なので、当然様々な危険が存在する。登山中に事故に遭うということは、これらの危険に気付かなかつた、危険に遭遇した時にそれをうまく避けることができなかつたことによるものである。危険には、大きく分けて「見える危険」と「見えにくい危険」の2種類がある。

「見える危険」は、自然そのものが持っている危険である。高所（低圧低酸素、紫外線）、天候の悪化（豪雨、落雷、猛暑、寒冷、強風等）、長大な縦走コース（岩場、ガレ場、鎖場、草付き、雪渓、樹林帯、藪等）、野生生物（熊、毒蛇、スズメバチ等）、冬山の雪崩等々あげればきりが無い。自然は人間が予測すらできない様々な現象をもたらす。それらの危険は、ベテランにも初心者にも全く同じ条件で登山者に迫ってくる。

「見えにくい危険」とは、登山者自身の側に起因している危険である。登ろうとする山の事前の研究や情報の不足、トレーニング不足や不良な健康状態での入山、装備不足や装備を持っていてもそれを使うための技術の未熟さ、ずさんな食糧計画、体力や技術がともなわない登山ルートを選択、生活技術や幕営技術の未熟さ、ナビゲーション技術の未熟さ、健康管理に関

する知識の欠如、天候判断の知識不足、リーダーシップやフォロアシップの欠如など、小さなことから致命的なことまで、様々である。

(2) 危険を避けてピンチに陥らないために

危険を避けて安全に楽しい登山を行うにはどうしたら良いか。

登山者が安全に登山を行うためには、登ろうとする山に応じた体力、技術、知識の三つの要素が不可欠である。

体力に関しては、科学的な知識を得てそれに基づき個々に応じた（登山者と登ろうとする山）登山のための効果的なトレーニングを行わなければならない。山岳部の活動はスポーツの一分野であり、トレーニングをせずに登山することは、他のスポーツに例えれば練習せずに試合に臨むのと同じである。

技術や知識に関しては、経験を仲間と共有することが大切である。

書店には、登山に関する書物やビデオがたくさんならんでいる。最近の傾向は、登山の記録や山にまつわるエッセーなどよりも、ハウツウもの、すなわち技術の解説のようなものが増えている。これらを熟読して、練習を重ね、経験を深めることは確かに大切なことである。しかしながら、人と人とのつながりの中で、経験を通して危険に対処する方法や避ける方法を学ぶことの方が最も効果的で、それらに関する知識や技術をしっかりと身に付けることができる。私たちの山仲間を考えても、何も知らない新人を一人前の登山者に育ててきたのは、とりもなおさず先輩や仲間の力によるところが大きい。人と人とのつながりの中で、自然に対応する知識や技術を経験的に学んできているのである。共に経験し学び合うことが、小さなミスを大きな事故につなげないために必要なことである。

人の話を聞いただけではなかなか知識や技術は身に付かない。経験したことは、理解することにつながり身に付けることができる。指導者として、他の山仲間（顧問等）と共に研鑽することは大切なことである。

3 山岳部の指導者は生涯現役

山岳部の指導者（顧問等）は、山岳部の生徒達と一緒に登山計画を立案し、生徒の安全を管理しながら登山を行い、大自然の中で感動を共有し、次の登山への夢を語り合うことのできる生涯現役のやり甲斐のある役割で教師冥利に尽きるものである。

(1) 山岳部の指導者は部員から信頼される登山者でありたい

高等学校の山岳部の活動は日常の活動（トレーニングや学習会・準備会等）が基礎になり、その上で実際の登山活動が行われるべきである。山へ行くときにだけ顧問、生徒達が顔を見合わせるということでは、本当の意味での教育活動としての部活動にはならない。部活動は、顧問教師の指導の下に、生徒同志がお互いに協力し合い、困苦を共にした日頃の努力と友情で一緒に学び、お互いに人格を磨きあっていくところに、部活動の得がたい成果があるのである。

山岳部の指導者（顧問等）はその意味でも日頃から山岳部の生徒を把握し、部員とのコミュニケーションを図るとともに、部員相互のコミュニケーションにも配慮し、日常の活動にも積極的に関わることが大切である。そのためには、指導者は教師であると同時に、山岳部員から信頼される登山者でありたい。

(2) 指導者としての日常の関わり

山岳部の日常の活動は、トレーニングと学習会・準備会である。トレーニングは一緒に行うことができれば最良であるが校務の都合でなかなか難しいのが現状であろう。しかしながら、来るべき登山計画のためにトレーニングの処方を指導することや各部員の能力に応じたアドバイスをすることは大切である。その活動は、登山計画書を作成するに当たって大変役に立つことである。

学習会・準備会は登山計画に関係することなので、指導者として必ず立ち会うべきである。登山は事前の学習や準備がきちんとできたかどうかで、安全に楽しく行われることが決まると言っても言い過ぎではない。

学習会・準備会を通して部員全員が何処の山をどのような日程、装備、食糧等を準備して登山するかをきちんと共通認識することができる。この過程を通して、危険を予知し回避することができ登山の安全性を高めることができる。適切な指導が顧問への信頼につながることは言うまでもない。

(3) 生涯現役

山岳部の指導者（顧問等）は、他の部活動とは異なり、生徒と一緒に活動しなければその役目を果たせない。他の運動部の場合は、フィールド（コート）の中で選手が活動し指導者はフィールド（コート）の外か

ら指導助言することしかできない。山岳部の指導者は、大自然の山というフィールドの中で生徒達と一緒に活動できるところに大きな教育的意義がある。これほど素晴らしい教育実践はなかなか無いであろう。また、登山は自然の中での活動であり当然自然には不確実で予測の難しい危険性がある。生徒の安全を管理するためには、指導者は危険を予知し回避しなければならない義務を負っている。そのためには、生徒達の活動状況をいつも観察している必要がある。そして顧問自身が指導者としての登山に関する体力、知識、技術、経験、判断力を身に付けていなければならない。その意味で山岳部の指導者は生徒と共に登山活動ができる生涯現役の登山者であると言える。したがって山岳部の登山活動は、生徒の安全管理を前提に、その学校の部の現状と指導者の現役としての力量で目指すべき活動の方向性や実際の登山計画が決定されることになる。

(4) 指導者としてのやり甲斐

山岳部の指導者（顧問等）として「教師冥利」に尽きることは、生徒一人一人が山岳部の活動を通して人間として大きく成長していく過程に関われることである。生徒達の山での活動を通しての、頂上に達したときの純粋な喜び、菌を食いしばって重荷を背負い続けた体力と精神力、風雨にたたかれながらもお互いに助け合う仲間意識、可憐に咲く高山植物に感動する素直な心、先輩後輩の秩序ある人間関係、自然に対す畏敬の念、森の野鳥の鳴き声に耳を傾ける優しさ、幕営地での山の歌の合唱による連帯感など、人間としての成長のための糧が山岳部の活動にはたくさん内在している。このような活動の指導者として生徒達と関わる喜びはこの上ないものである。

登山指導者の責務として「安全確保義務」が問題にされる。すなわち、危険を予見する義務をどれだけ果たしていたか、危険を回避する義務をどれだけ果たしていたかの2点である。これらの安全確保義務を念頭において、安全登山の指導者として生涯現役で活動することが大切である。

多くの山岳部の卒業生は、「山岳部で活動して良かった」と口にする。山の友情と師弟関係は永続する心の宝、人生の糧になるものである。

（渡邊雄二）